クロスロード新聞

第21号

2009年1月31日

# ファシリテータのつどい報告
# &
# 新型インフルエンザへの備えは?

発行元：108-8345　港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部　吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局

## 今号ももりだくさん

今号は、昨年秋のファシリテータのつどいin東京&神戸の報告と、パニックの備え第2弾として新型インフルエンザへの備えを取り上げました。クロスロード新型インフルエンザ編も一部掲載。地域での議論にご利用ください。

また、前回まで連載しておりました防災体操「うちらのため」は、実施の際に順序があります。前号でページの配置の都合から、わかりにくくなっていたことをお詫びします。

最初が準備運動→大きく身体を動かす運動→整理体操（ストレッチにはじまり深呼吸に終わる）という構成になっておりますので、12個をやってごらんになりたい場合は、歌詞の順番、すなわち、次の順序でなさっていただくのが効果的です。

地震→火事→台風→洪水→道路→ひったくり→
雷→ハチ→津波→暴漢→ご近所さん→ほほえみがえし
(歌詞の配列については、新聞第17号をご覧下さい。)

## ファシリテータのつどいin 東京＆神戸

ファシリテータのつどいin 東京の実況中継は、2ページから、クロスロードのつどい　in　神戸の実況中継は、3ページから、掲載しています。すべての発表内容をお知らせできないのは、残念ですが、少しでも雰囲気を味わっていただければと思います。

また、参加者の一人としてのファシリテータのつどいin 神戸の感想を、神戸学院大学の舩木伸江（ふなきのぶえ）先生に、報告をいただきました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今回、クロスロードのつどいに参加させていただいて、改めてクロスロードのもうひとつの意味「人々が出会い、言葉を交わす場」を実感したような気がします。

神戸の方だけでなく三重や広島、高知からも集まった部屋の中は熱気でいっぱいで、席が足りないほどでした！受付を手伝わせていただいていたのですが、お休みの日にも関わらず、名簿リストに名前のある参加者たちがどんどんやってきて部屋がうまっていくにつれ、わくわくしていました。

発表はとても楽しく、面白く、かつ、興味深く、魅力的な人たちがクロスロードに興味を持つのか・・？と疑問に思いながらプレゼンを聞いていると、あっという間に時間が過ぎていました。

私は広島県呉市出身なのですが、大学から神戸に来ており、京都で防災について学んだので、呉での防災活動のことは知りませんでした。しかし、以前のクロスロードのつどいで（今回の発表者でもある）林国夫さんと出会うことをきっかけに、実家がある地元のまちとつながり、そのつながりが広がっています。

今回のつどいでは、兵庫県立舞子高等学校環境防災科の学生さん（きっと最年少参者では・・？）が来られていました。高知大学に行き防災教育をしていきたい！と考えておられ、高知県の方とお話をすることが目的で参加されたようです。

私のように、クロスロードの会で偶然出会う縁もあるでしょうし、舞子高校の学生さんのように縁をつくるために参加された方もいらっしゃると思います。いずれにしても、クロスロードが作る出会いの場の広さに改めて驚かされました！

### 目次

今号ももりだくさん　1
つどいin 東京＆神戸　1
東京実況中継　2
つどい　in 神戸　3-6
つどいin 神戸を終えて　7
関西は熱かった　7
ソナエーター(9)　8
こんなところに心理学(21)　9
売り切れ！　9
新型インフルエンザ編　10
インフルエンザ流行中　10

クロスロード次号のご案内
発行予定日：2009．2．28．
神戸のつどい報告続編(高知県のまなぼうさい、あそぼうさい、さけぼうさい&ふりかえり報告）名古屋ファシリテータ講座報告、問題の作り方講座、などなど、間髪入れずにもりだくさん！

**責任編集**

- チームクロスロード
- クロスロード・サポーター
- SPECIAL THANKS:
  高知県地震・防災課
  小溝智子（漫画企画）

## つどいin東京（実況中継）

2008年10月22日慶應義塾大学で行われたクロスロードファシリテータのつどいを、時事通信社の中川さんが実況中継してくださいました。中川さんの発表部分は発表資料から事務局がまとめました。

（林さんの発表）

消防職員の研修にクロスロードを取り入れるのは非常に役に立つ。また、高齢者をいかに救うかが呉市の命題。矢守、吉川両先生に来ていただき、要援護者のクロスロードを実施した。クロスロード文化が呉にはできあがった。

消防職員の研修については、硫化水素の自損事故が相次いだ。なんとかせねばと、クロスロードを使ってやろうと若い署員が提案した。ホテルではどうか。避難をするか。木造の旅館ではどうか。見に行かないということではあとで問題になるだろう。不作為をあとから問題にされる。こういうことを議論している。

消防職員のメリットは、階級や立場、年齢で関係なく、自分の考えを述べることができる。職場の中でやるときには階級章を取り外すことから始める。課題の抽出、合意形成を楽しみながらできる。災害の経験を語る場にもなる。ワンポイントアドバイスもどんどん出てくる。ファシリテーターの技術を身につけて、市民の講習会にも応用できる。非常に活発で今までの中で一番楽しい訓練だと言ってくれた。独自のマニュアルを作ることが出来た。クロスロードの副産物として、硫化水素対応マニュアルができた。

（以下質疑応答）

ー現職教員の再教育の中で、ばかばかしいと思う人は先生になるなと言うことも言えるかなと。楽しみながらできるというが、ゲームで楽しんではいけないという意見はあるか？

特にない。エンジョイの楽しさではないが、充実した場になると言う意味で楽しい。

ー問題を作るための手法は？

文字数を少なくして、言い回しをあいまいにしてやる。問題を作ることもやらせたことがある。いろいろ考えることで、俯瞰して見えることがある。正解を出すことは必要だが、一つの中に隠されたモノがあることは問題を作ることから。いかにあいまいに問題を
作っていくことから。いろんな条件を考えないと、あいまいにならなくなるので、クロスロードでなくなる。一つの現場を点ではなく、線や面で見える力、眼力を養っている。それをやってクロスロードの問題を作ると、マンションなら屋外階段、屋内階段がある。じゃあどうなのか。屋上はどうか、開放廊下はどうか。最後にはマニュアルに持っていく。あいまいだけなら、現場は出てこないが。入って２年目の消防士が所長にものが言える場ができるのも楽しい。けんかにはならない。

（中川さんの発表）

「私のクロスロード布教活動」と題して、主に横浜を中心としたクロスロード実践を紹介くださいました。すべてをあげることはできませんが、主なものを以下にご紹介します。

・2006/01/27～2007/01/22
防災リスクマネジメントＷｅｂでの連載（全10回）
2006年4月3日　時事通信社会議室にて、中央防災会議減災の国民運動専門調査会の専門委員らでのクロスロードＷＳ
・2006年11月30日　神奈川大学実践的防災まちづくりコーディネーター養成講座にて、横浜版クロスロード　６問作成
・2007年5月22日　横浜栄・防災ボランティアネットワーク定例会で紹介
・2007年8月8日　ボランティアのための「命を守る防災講座」
・2007年9月5日　たんぽぽ（福祉ボランティアグループ）　防災講座
・2007年9月27日
「杜の会」（中野地域ケアプラザの運営母体・社会福祉法人）の幹部職員向け防災講座
・2007年12月1日　パパとママの防災講座「子どもを災害から守るために」横浜市桂台地域ケアプラザ
・2008年2月19日（火）　庄戸・シニアクラブ定例会
2008年3月29日（土）　日下地域ケアプラザ　ささえあい防災講座
・2008年7月12日　栄区本郷中央地区協働福祉講座
・2008年8月12日　中学生ボランティア講座
・2008年8月23日　第9回地震火山こどもサマースクール「都を作った盆地のナゾ」
・2008年9月19日　中野地域ケアプラザ職員向け防災講座
・2008年9月30日“手話サークル「希」”メンバー向け　「命を守る防災講座」

中川さんたちのグループで現在制作中の災害ボランティア安全編を参加者みんなでやってみました。たとえば、次のような問題です。

あなたは・・・災害ボランティアセンターのコーディネーター
資機材をもったボランティアグループが一般ボランティアには出来ない仕事もできると言ってきた。受け入れる（Yes）？受け入れない（No）？

この後問題の作り方で議論が沸騰しました。。。

（事務局より：問題の作り方については、神戸のつどいでもふりかえりで議論になったところなので、次号で取り上げて議論したいと考えています。）

# 「クロスロードで子育て支援→人生相談？」つどいin 神戸

「クロスロードは人生相談である」とは、先日の「クロスロードのつどい」で吉川先生からお聞きした言葉です。私がクロスロードと出会ってから４年、ファシリテーター歴は３年になりますが、クロスロードは、メンバーとして参加するのも、ファシリテートするのも、どちらも非常に面白く、未だに「はまって」飽きることがありません。クロスロードのつどいの時に、呉消防の林さんが、「防災ダックをやる時は、前日からわくわくする」とおっしゃられていましたが、私も「クロスロード」をするときは、打ち合わせ時点から「わくわく」しています。なぜなのか、その理由の一つが、この吉川先生の言葉で少しわかったような気がします。クロスロードを通じて、いろいろな人の人生を垣間見ることができるからです。そして、そのことを通じて、自分の考えの幅広がり、成長させてもらっているのではないかと考えるからです。

私が子育てのジレンマにクロスロードを使えるのでは、と思ったのも、元々は自分の子育てに関する問題を誰かに相談し、共有したい、というのがきっかけでた。たまたま主任児童委員さんの研修会で、当時自分が抱えていた子育ての悩みを設問にしてクロスロードをやってみる機会を得ました。子育ての大先輩である主任児童委員さんたちの意見をお聞きする中で、頭ではわかっていた「子育てには様々な問題の捉え方と解決方法があり、正解はない」ということや、子どもの発達段階に応じて悩みも違うのだ、ということを改めて実感し、多くの「考えるヒント」や「気づき」を得ることができました。そして、他の悩めるお母さん・お父さんにも使えるように展開したいと思い、子育て関係者の会や児童館指導員研修での実施を経て、今に至っています。（詳しくは『2008年12月20日発行　クロスロード新聞臨時増刊号その⑵』をご覧ください。）

「人生相談」とは、『幾多の社会人生上における「悩み」「苦しみ」「怒り」「悲しみ」の相談事の総称』だそうです。人生相談において、ある問題に共感し、真剣に考え、解決策を探し、最後にはそれを乗り切るというプロセスを通じて、相談する側もされる側も成長するのではないかと思います。クロスロードも、設問作成～実施～ふりかえりと言う過程を通じて、自分を見つめ、他人を見つめ、そしてその事を通じて、参加者・主催者・ファシリテーターを問わず、関わった全ての人が成長するというツールではないかと考えます。また、「人生相談」に引き合うような、様々な場面への応用可能性を秘める、とても魅力的なツールでもあります。

とは言え、どんなバージョンに展開されても、元祖「クロスロード」が開発された目的～阪神・淡路大震災における神戸市民や職員の災害対応の経験を伝承する～を忘れてはならない、と心がけています。それこそが、私たち神戸クロスロード研究会がクロスロードを広めて行こうとしている目的そのものでもあり、クロスロードの「根」の部分だと考えるからです。子育て編をはじめ、様々なバーションを作るときは、初めに主催者や参加者にクロスロードを体験してもらいますが、その際には必ず「元祖クロスロード(神戸編・市民編)」の設問を何問かやっていただくことにしています。微々たる努力ですが、様々なバーションの広まりに乗せて、「震災経験の伝承」もきちんとやっていけたら良いなあ、と思っています。

(神戸市西区竹の台地区子ども連絡会代表
濵　尚美さん)

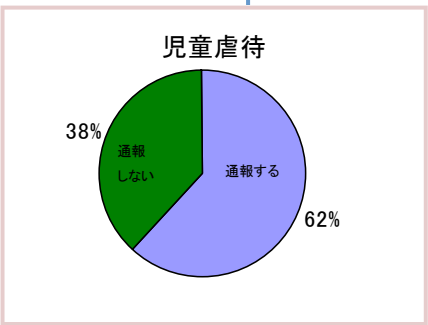
**クロスロードのつどい　in 神戸　プログラム**
**発表１：矢守先生、吉川先生**
**発表２：高知県危機管理部　小溝智子さん**
**発表３：星和台・鳴子防災福祉コミュニティ（神戸市）　吉本和弘さん「地域コミュニティ活性化のためにできること」**
**発表４：呉市消防　林　国夫さん**
**発表５：伊賀市社会福祉協議会　乾　光哉さん「福祉版クロスロードの全国展開」**
**発表６：神戸市　浜　尚美さん「クロスロードの子育て支援」**
**意見交換「クロスロードの明日」**
**懇親会**

**あなたは・・近所の人**

- 夜11時ころ、子供の泣き叫ぶ声が続けて3晩聞こえた。バシッと叩くような音もする。夫（妻）は放っておけというが、**通報する？**

YES：通報する／NO：通報しない

**参加者の意見分布→**




**児童虐待**

- **YES：通報する**
  - ・三晩続く／叩く音
  - ・疑わしい場合でも通報で動いてくれる
  - ・もし虐待だった場合、とりかえしのつかない事になる
  - ・通報先？
- **NO：通報しない**
  - ・夜泣き？様子を見る
  - ・その家の人を知っているかどうかで違う
  - ・近所の人に確認
  - ・本人に直接聞く
  - ・三日が悩ましい
  - ・通報先？

**主催者の意図・・**

法改正の内容や通報先、通報してからの各関係機関の動きについて紹介できる

# 地域コミュニティ活性化のためにできること

過去３回、地元の星和台・鳴子防災福祉コミュニティ主催の「クロスロードin星和台」を開催し、クロスロードが地元に受け入れられてきました。どのようにしてクロスロードが地域行事化できたかを主題にして発表させていただきました。

成功の第１は参加者がクロスロードの楽しさを理解し、口コミで住民に広まったことであり、第２は主催者である防コミの役員もまたクロスロードによって大きな満足感を得たことです。

第１の要素は、参加者に感動を呼ぶ問題を提供してきたことです。感動を呼ぶ問題は地域住民が関心を持つ事例にあり、実際に「困った」「悩んだ」という実例を基に作成しました。感動は「そうだ！ある！ある！」という「体感」「実感」できる問題から得られるものと考えました。

第２の要素は、地域のまとめ役として日頃から住民との板ばさみとなり悩みの絶えない防コミの役員が自らの悩み問題を提供し、役員会の中でどうすれば参加者に訴えることができるかを検討してきたことです。地域住民がクロスロードの場で問題に隠された役員の悩みを真剣に議論している姿を目の当たりにしたのです。

役員会で検討した問題を皆さんに考えていただきました。

・よく見かける実例に条件を加えて議論が楽しくなるように修正した問題とその解説
・住民に知って欲しい情報をわざと隠して、情報の当事者がコメンテータとなる問題とその解説
・地域の事情により「没」となった問題
・全くメッセージ性のない問題とメッセージ性を取り入れた問題

地域の活性化を図ろうとする者にとって、クロスロードの利点は「事前準備に手間がかからないこと」「ルールがシンプルで説明しやすいこと」です。地域住民にとって、嬉しいことは「生の事例を追体験できること」「異なる意見を容認できる環境を設定する場を提供して少数意見を主張しやすくなること」です。

最も大きな利点と思われるのは、クロスロードが年齢を問わずに楽しめるゲームであることです。青少協の会長さんから「クロスロードは世代間交流のワークショップ手法として非常に有効である。」と評価されました。クロスロードは毎年８月に実施しています。中高生も参加しやすくするためです。

皆様も是非、地域の活性化のためにクロスロードを活用してください。

（神戸市星和台・鳴子防災福祉コミュニティ
吉本和弘さん）

## 地域に根付かせる工夫

- 毎年、新しい問題を提供する。
- 出題の裏にメッセージをこめる
- 運営は、役員会がする
- 次につなぐ。（無理をしない）

## ポイントは作問にあり

- 「ある！ある！」という感動を呼ぶ問題

  **「体験」・「体感」・「実感」は、「困った」「悩んだ」「失敗した」という実例から生まれる。**

  **→役員会で良否を検討する**

  **→意見が分かれる問題が望ましい**

- 普段言えない思いを問題にすることも可

  **→コメント/メッセージが重要（参加者の気づきを誘導）**

（参考例題）

## あなたは　住民

- 可燃ゴミ収集日に指定されたゴミステーションに生ゴミを捨てに行きましたが、すでに収集された後でした。
- あなたは他地区の未収集のゴミステーションに捨てに行きますか？

Yes（捨てる）　OR　No(捨てない)

←これ(左)が、こう(右）→なると…

## あなたは　住民

- 可燃ゴミ収集日に指定されたゴミステーションに生ごみを捨てに行きましたが、すでに収集された後でした。次の収集日は子供たちと夏休みの旅行に出かけてしまっている。
- あなたは他地区の未収集のゴミステーションに捨てに行きますか？

Yes（捨てる）　OR　No(捨てない)

# 福祉版クロスロード

クロスロードのつどいin神戸に参加させていただき、おまけに発表までさせていただきありがとうございました。クロスロードファシリテーター資格を持たない私のような者が発表までしていいものかと最初は心配でしたが、吉川先生や矢守先生から、クロスロードの他分野での活用に関して、懐の深さを感じさせるメッセージをいただき、参加してよかったと感じるとともに、クロスロード伝道者としての責任の重大さを痛感しています。

私がクロスロードと出会ったのは、２００８年８月に、神戸クロスロード研究会の皆様に伊賀に来ていただき、「防災啓発ゲーム（クロスロード）指導者研修会」を開催した時でした。クロスロードの存在自体は、もっと前から知っていたのですが、クロスロードキットは入手したものの、実際にどうやってやるのかは頭の中だけの想像でしかありませんでした。神戸クロスロード研究会の皆様の指導により、実際にクロスロードを体験し、私自身、防災啓発ツールとしてだけでなく、福祉の分野においても応用できるのではないかと直感しました。

福祉版クロスロードの開発にあたって、最初に着手したのが、社協合併編でした。伊賀市は平成１６年１１月に１市３町２村が合併して伊賀市となったのですが、市町村合併に伴い社協も合併を余儀なくされました。合併って、１００年間で、そう何度もあることではないので、一種の災害と言ってもいいでしょう。社協合併によって、様々なジレンマに遭遇した事例をクロスロードの設問にすることにより、全国各地の合併社協の置かれている実状を共通の問題として共有することが可能となりました。

次に手掛けたのが、地域福祉担い手編でした。宮崎県社協から依頼を受けた地域福祉コーディネーター養成研修のワークショッププログラムとして作成しました。社協職員、施設職員、ＮＰＯ職員など、地域福祉に携わっている職員が直面するジレンマを設問にしました。災害時のクロスロードも地域福祉担い手としてジレンマを共有することができました。

地域福祉担い手編の改良版として作成したのが、社協職員編です。多くの社協職員が直面するジレンマを設問にすることにより、社協職員向けの研修に活用することが可能となりました。全国には何万人という社協職員がいます。クロスロードを全国の社協職員にマスターしてもらって、本来の防災啓発にも役立てられればと思っています。

唯一学会で発表したのが、福祉教育編です。私が所属する日本福祉教育・ボランティア学習学会第１４回徳島大会において自由研究発表として、“防災啓発ゲーム「クロスロード」を応用した福祉教育クロスロード”と題して発表しました。教育分野におけるクロスロードの導入はすでに道徳教育の分野においてよく似た手法が取り入れられているようですが、福祉教育においても障がい理解やボランティア理解において有効なツールになりそうです。元々曖昧なジャンルにおいてクロスロードは多様な気づきを誘発するコミュニケーションツールとして有効であることを確信しました。

今後は、高齢者、障がい者、民生委員といった地域福祉当事者編や、総合相談や権利擁護といった利用者支援編、ＮＰＯ活動やボランティアコーディネートといったボランティア編なんかも作っていきたいと思います。

クロスロードとの出会いによって、これまで対象者や課題に対応して選択してきたワークショップ手法のバリエーションが増え、充実したワークショップを提供することが可能となりました。クロスロードの持つ、ゲーム性、簡潔性、コミュニケーション性は、アイスブレイク効果だけでなく、選択の多様性や意志決定プロセスにおける共感性や率先性を高める効果も期待できます。クロスロードは防災啓発だけでなく、福祉分野においても有効なリスクコミュニケーションツールとして、福祉版クロスロード伝道者として、全国各地へ広めていきたいと思います。

（三重県伊賀市社会福祉協議会地域福祉活動推進部長
乾　光哉さん）

↑受付の行列

矢守先生ナマズ帽をかぶるの図

乾さん発表の様子→

# お騒がせしました！「ぼうさいダック」と「（歌＋防災＋健康体操）うちらのため」！

声を出し，身体を動かし，楽しく遊びながら自助行動が学べる「ぼうさいダック」，楽しんで頂けましたか？

「ぼうさいダック」。何となくイメージはあるけど，実際どうやって進めるんだろう？子供たちの反応は一体どうなんだろう？つどいに参加した皆さんは，ほとんどこういう想いを抱かれていたのでは？と思います。

当市で2006年春から保育士さん・幼稚園教諭さんの指導を仰ぎ，地域の民生委員児童委員さんも参加して頂きながら進めてきた「ぼうさいダック」。子供たちの笑顔と躍動感ある写真や思い出残る描画，指導にあたる消防職員の楽しそうな顔，そして参加の皆さんが子供になって（まさか，まさか…）「ぼうさいダック」を体感することで具体的なイメージを持って頂けたかなと感じています。ダックはとにかく楽しいです！その一言に尽きますね。

指導するのは消防職・団員だけでないことも紹介させて頂きました。地域の民生委員児童委員さんや大学生も進行役を努め，保育・教育施設と地域とが「ぼうさいダック」というツールで交流を深めているのも呉市の大きな特徴です。

そして大好評の「うちらのため」。呉市社会福祉協議会の熱血社協マン近藤吉輝さんの「さわやかな」進行により「歌＋防災＋健康体操」が紹介されました。ご高齢や障がいを抱え防災訓練に参加できない方々への防災意識の啓発と健康のために開発されたものです。

♪もしも地震が起きたなら　まずは頭を守りましょう　両手で頭を抱え込み　机の下にもぐりましょう♪―　地震や火事，洪水，交通安全，挨拶など「ぼうさいダック」と同じ１２種類。童謡「うさぎとかめ」をベースに災害時の心得を盛り込んだユニークな替え歌と体操が，「ぼうさいダック」同様，「楽しみながら大切なことが学べる」と大好評で，今，全国的に展開されようとしています。

つどいの後の１月１６日，阪神・淡路大震災１４年の前日に，子供たちと地域のご高齢の方々と社会福祉協議会の皆さんが「うちらのため」を楽しく展開し，読売新聞に大きく掲載されました。私も管内の小学校で，総合防災教育の中で８１０人ダックを実施しました！（写真）

今回のつどいで一番伝えたかったことは，「楽しく防災を」ってことです。防災という命に関わる深刻なことを学ぶのに「楽しいとは？」という意見もあろうかと思います。防災意識の全体的な向上を目指すのであれば，大多数の人々の参加と興味が必須条件ではないでしょうか。今後も防災を特別なものに位置付けるのではなく，生活の一部や交流として地域の方々と共に楽しく取り組んで行き，地域防災力の向上に繋ぎたいと考えています。

最後に，東京のつどいに続き貴重な機会を与えてくださった矢守先生，吉川先生，そして神戸クロスロード研究会の皆様に心から感謝します。

（呉市消防局　林　国夫さん）

**これまでの幼児対象の防災訓練は・・・**

- 給食室からの出火を想定し
- 非常ベルを鳴らし，非常放送を聞かせ
- 「早く，静かに，お庭へ！」

**おさない・はしならい・しゃべらない・もどらない**

- 教室内で，先生が幼児と一緒にいて
- 先生の具体的な指示に基づき
- 幼児がそれを聞いて
- 初めて動く！

という前提で成り立っている

- 幼児にとっては，受身・指示待ち型
- 保育士先生にとっては，台本設定型
- 園庭で遊んでいたり，発表会，食事中
- 先生がいないとき　　どうするの？

**災害は突然やってくる！**

**自分の身は自分で守る**

**「自助の心」を幼児期から**

**画期的な教材！　ぼうさいダック**

# 「クロスロードのつどいin神戸」を終えて

昨年12月20日(土)午後に開催した「クロスロードのつどいin神戸」は、募集参加者数50名に対して参加者52名、懇親会も27名の方が参加し、盛況のうちに終わりました。年末の慌しい時期にもかかわらず、ご参加いただいた皆様にお礼申しあげます。地域的にも、東海、近畿、中国、四国と日本の中央部の各方面から、遠方にもかかわらず参加いただき、西日本大会という位置づけを超えたものになりました。

内容については、別に報告があると思いますが、矢守・吉川両先生を含めた6組7名の発表は、それぞれの実践に基づく深い内容であり、クロスロードの進化あるいは深化を感じるものばかりでした。両先生からは、海外にも紹介され、広がろうとするクロスロードの姿が報告され、逆に、吉本さんからは、一地域において３年連続で行なわれたクロスロードの実践が発表されました。乾さんと浜さんからは福祉・子育てという防災以外の分野での展開が発表され、林さんは、呉市社会福祉協議会が「歌＋防災＋健康体操」にまで発展させた「防災ダック」を紹介されました。そして、これら全ての発表に共通するのは、小溝さんの報告にあった「あそぼうさい」という言葉が表現している、考えたくない課題について、少しでも楽しく、多くの人が、意見や知恵を共有するクロスロードの精神でした。

意見交換の部では、西さんのファシリテートによる「ふりかえり」も行なわれました。その内容についても別途掲載されると思いますが、参加者側も、防災や地域活動などの実践者であり、それぞれの視点からクロスロードや防災ダックの有用性や課題について、様々な意見が提示されていました。質問などについて、回答・コメントや意見交換をする時間を十分用意できず、申し訳ありませんでした。

このような発表者と参加者の共鳴により、今回の「つどい」は、防災教材として生まれたクロスロードの応用編の発表会というに留まらず、一段と高いレベルのよる意見・知恵の交流が図られ、「つどい」全体が、クロスロードのステップアップのための「クロスロード」の様相を呈していたと言ってもいいと思っています。神戸クロスロード研究会の３周年を記念して用意した「神戸クロスロード瓦せんべい」も好評をいただき、安堵した次第です。

これからも、神戸の経験から生まれたクロスロードを大切にすると共に、今後の展開が一層楽しみになった一日でした。今回の経験は、また次の機会に生かしたいと思います。

最後になりましたが、「つどい」の開催にあたり、協力・連携していただいた、矢守・吉川両先生、神戸学院大学の舩木先生と学生の井口さん、稲田さん、そして神戸クロスロード研究会のメンバーに感謝いたします。

（神戸クロスロード研究会　柿本雅通さん）

**参加者に大人気！オリジナル瓦せんべい**

# 関西のクロスロードは熱かった。。。

2008年12月20日、クリスマス間近の神戸でクロスロードのつどいin神戸が開催されました。かねてから「関西方面のクロスロードサポーターは熱い」と聞かされており、一度は関西でのファシリテータのつどいに参加したいと考えていたので、思い切って参加させていただきました。

大勢の参加者で熱気あふれる会場で、バラエティに富んだ発表を聞かせていただきました。サブタイトルに「クロスロード　どこまでやるの？」とあるように、クロスロードの新しい展開についての発表が多く、クロスロードの「裾野の広がり」を痛感した一日となりました。

この「裾野の広がり」には、大きく2つの方向性があるようです。ひとつはクロスロードを新しいコミュニケーションツールとして活用し、防災に限らず社会福祉や地域コミュニティの形成等に役立てていこうという方向。もうひとつは、手軽に楽しく防災を学んでいこうというクロスロードの特性を応用して、遊びや体操等の手法で防災を学んでいこうという方向です。どちらもこれまでのクロスロードとは一味違った新しい展開で新鮮に感じました。「さまざまな地域活動にクロスロードを活用していこう」、「子供たちやお年寄りたちと体を動かし、楽しく防災を学んでいこう」、どちらもクロスロードから始まった新しいムーブメントと思いました。クロスロードは今、新しい時代を迎えようとしているのかもしれません。

発表の終了後、会場の使用時間ギリギリまで意見交換がなされ、その後アルコールも加わってさらに熱い議論が交わされました。ファシリテータのつどいはやはり懇親会まで参加しなくてはいけませんね。

結論を申しますと、関西のクロスロードは熱かったです。うまく説明できないけど関東とはまた違った熱さはなかなか居心地がよくて、次の機会にもぜひ参加したいと思いました。

（静岡県田子の浦港管理事務所　板坂孝司さん）

# ソナエーター(9)：
# 新型インフルエンザにソナエーター

仕事がら、海外、特に発展途上国に行くことがあります。1995年6月から1年間をアフリカのザンビアという国（首都のルサカ市）で生活したのを皮切りに、これまでアフリカではガーナやナイジェリア、中国の新疆ウイグル自治区にそれぞれ何度か行っています。それぞれの地域における感染症に関する研究を行うためですが、訪問国の滞在先は通常日本人が行くことのない地域ばかりです。

感染症研究のために感染リスクの高い地域に行っているわけです。これまで私は使用可能なほとんどのワクチン接種を受けています。私は麻疹、風疹、おたふく、水痘は子供のころに罹っています。私が大人になってから受けたワクチンは、狂犬病ワクチン、黄熱ワクチン、A型肝炎ワクチン、B型肝炎ワクチン、髄膜炎菌ワクチンです。多くの日本人にとって、狂犬病や黄熱、髄膜炎菌髄膜炎など、気にも止まらない感染症ですが、これらの病気は海外では（特に熱帯地域の国々で）広く流行しています。私のように、海外に仕事で行く機会の多い人はこれらのワクチン接種を受けておく必要があると考えています。

アジアやアフリカで日本人が罹りやすて、予防可能な感染症はA型肝炎です。若い日本人がこれらの地域を旅行している最中に、A型肝炎に罹り、大変な事態になることもあります。また、狂犬病は、狂犬病ウイルス感染している犬（いわゆる狂犬）に咬まれて感染しますが、適切に治療しなければ100%死んでしまう病気です。旅行で流行地に行く場合には、滞在期間が短いものであってもA型肝炎と狂犬病のワクチン接種は受けておくべきでしょう。

一方で、感染症の多くはワクチン接種で予防可能でないということも自覚しておく必要があります。AIDS、デング熱、チクングニア熱、マラリア、下痢症、結核、等々、枚挙にいとまはありません。確かに天然痘ワクチン接種を世界的に行うことで、1977年までに天然痘を地球上から根絶することは可能でしたが、この例外を除いて人間が感染症から逃れることは不可能なのです。日本に限らず、現時点で多くの人々が、様々な感染症に罹患して、病気と闘い、あるものは回復して、あるものは残念ながら亡くなられています。冬になると毎年インフルエンザや下痢症が流行ります。1999年にアメリカ大陸で確認されたことのなかったウエストナイルウイルスによる感染症が流行しました。2003年には、SARSが世界的に流行したのは記憶に新しいところです。そして現在、新型インフルエンザのパンデミックの危険性が叫ばれているのです。

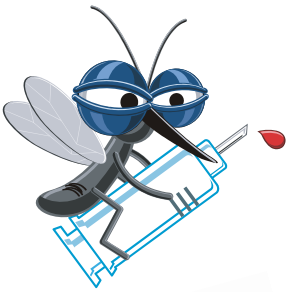
このよう状況を考慮すると、感染症のある世界に生きていることが当たり前のことであり、感染症対策とは極めて困難な営みと考えざるを得ません。

社会が感染症の流行に対して抵抗力を獲得することが、社会的対策の一つです。一方で、個人レベルで感染症に罹るリスクを減らすこともとても大事なことです。自分のライフスタイルを考慮して必要なワクチン接種を受けることはもちろんのことです。人が感染症に罹るには他人（自分以外の人という意味）とそれなりに濃厚な接触が必要なのです。つまり、その濃厚な接触を避けることこそ個人的な感染症予防のための有効な対策となります。AIDSを含めて性病予防にはセックスをするときにコンドームを使用するとか、風邪やインフルエンザ予防には「うがい」と「手洗い」、食中毒を予防するには、「生水を飲まない」、「火を通したものだけを食する」、等々、現実的な対応策があります。こう考えてみると、感染予防は、何だか面倒なものであり、味気ないもののようですね。感染症を専門に研究している私は、「感染予防」という言葉のもつ困難さを、ますます強く実感しています。

最近話題の新型インフルエンザ対策について、他の感染症対策と関連させて考えてみると、その対策は極めて困難と言わざるを得ません。昨今の報道に接していると、H5N1高病原性鳥インフルエンザ（H5N1ウイルス）が次のパンデミックの原因ウイルスと考えている人が、専門家を含めてほとんどのようですね。H5N1ウイルスの人の感染症の死亡率はほぼ50%で、極めて高い値です。しかし、H5N1ウイルスがパンデミックの原因として世界中で蔓延するとすれば、この高い死亡率を維持したままではあり得ません。もし、パンデミックが発生したら、人ごみを避け、うがいと手洗いを頻繁にして、風邪やインフルエンザになったら休養をとって回復を待つ。それしかないのです。

多くの報道で、「感染爆発」なる言葉が蔓延しています。新型インフルエンザウイルスによるパンデミックに関して、感染症の危険性をことさらあおるような報道や番組に接すると、ことさら不安を煽っているように思えてなりません。冷静に新型インフルエンザパンデミックについて考えて欲しいと思います。新型インフルエンザのパンデミックといえども、今世界中で蔓延している多くの感染症のひとつに過ぎないのですから。

（国立感染症研究所　ウイルス第1部　西條政幸先生）



# こんなところに心理学(21)：予言の自己成就

心理学や社会学でよく知られた言葉に「予言の自己成就」というものがあります。「このようになるのではないか」と予期することで、それにあった行動を無意識的に人はしてしまい、結果として、その予期が現実になることをいいます。

予言の自己成就のよく知られた例としては、1973年のいわゆるトイレットペーパー騒動があります。当時の社会的背景として石油ショックがあり、その結果トイレットペーパーが品不足になるのではないかと考える人が出てきました。その人たちがスーパーに買いだめに走るのを直接的、あるいは間接的(テレビの報道などを通して)見た人が、さらに買いだめに走る、ということになり、結果的にトイレットペーパーの品不足が全国的に起こりました。

この話の発端の頃には、実際には、当時トイレットペーパーは品不足ではありませんでした。しかし、一時的であれ、スーパーの店頭からトイレットペーパーがないのをみれば、「やはりうわさの通り、トイレットペーパーは品不足なのだ」と、思う人が出てきますから、その人は、買いだめしておかなくては、と思うことでしょう。このようにして、通常より多くのトイレットペーパーを買う人が増えれば、供給量は超えてしまうので、品不足が現実に起こった、すなわち、予言が自己成就してしまったわけです。

対人関係でも同様の現象が知られています。アメリカ合衆国ではこのたびはじめてアフリカ系アメリカ人(黒人)の大統領が生まれましたが、建国以来それだけの時間がかかったということは、黒人に対する偏見がなかなか解消しなかったということの証拠でもあります。たとえば、白人が「黒人が暴力的だ」というように偏見を持つことで、黒人に対して否定的な態度を持つようになり、その差別的な振る舞いの結果として黒人が自暴自棄になって暴力的な犯罪を起こす、というのも偏見が自己成就していくプロセスです。

折しも受験シーズンですが、試験に失敗するかもしれないと不安に思っている受験生は、そのことを気に病むことに時間を費やしてしまって、受験勉強に身が入らないため、本当に不合格になってしまう、とか、教師が持つ期待の通りの成績を生徒がとってしまう（「教師期待効果」といわれています)などの例もあります。

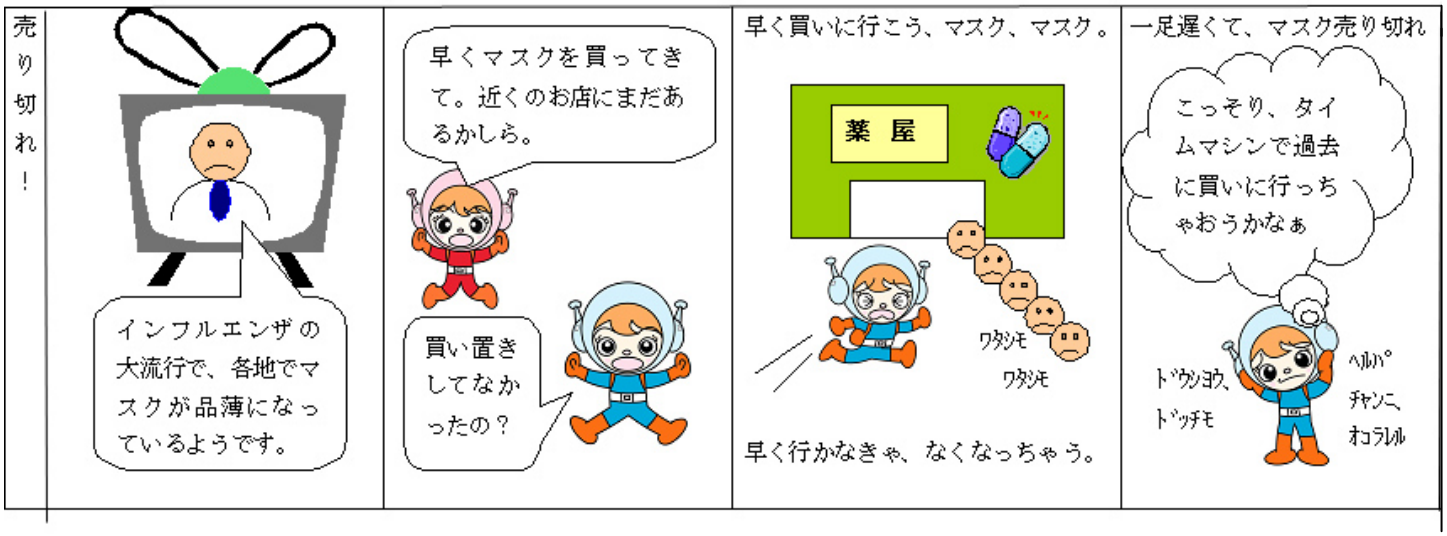
新型インフルエンザや大災害に対して、パニックが起こるかもしれないと言われる方がありますが、このように「パニックが起こる」と予期していると、本当にパニックが起こってしまうのですね。その背後には、パニックに近い徴候がちょっとでもあれば、「やっぱり」ということになって、その信念が確証されてしまう、というメカニズムがあります。この時、最初の予期が本当に正しいものであるかどうかは問題となりません。トイレットペーパー騒動の例がいい例です。ですから、パニックを起こさないようにすることの第一歩は、そういう誤った信念や、人々に対する否定的な態度を持たないことだと言うことができます。

仙台の田中勢子さんから、松島の尼僧紅蓮という方の和歌を教えていただきました。この方は、ご主人が亡くなってから仏門に入られたのですが、庭の梅をみて亡き夫を思い「植え置きし花の主ははかなきに軒端の梅は咲かずともあれ」と歌を詠んだところ、次の年は梅が咲かなかったそうです。そこで、考えを改めて「咲けかしな今は主とながむべし軒端の梅のあらんかぎりは」と詠んだところ、次の年はいつものように梅の花が咲いたそうです。梅の花も人と同じように、咲くと思えば咲き、咲かないと思われれば咲かない、とこのエピソードは語っています。

防災も危機管理も、大変なことは多いですが、できるだけ前向きに、ポジティブシンキング！で行きたいですね。次回はそういう人がリーダーに向いているというお話です。

# 売り切れ！

**高知県防災キャラクター©やなせたかし**



# 新型インフルエンザ クロスロードの紹介です

公衆衛生協会から発売されている新型インフルエンザ編の一部をご紹介します。大流行(パンデミック)が予想されているところですが、まだまだ市民と行政の間で十分な議論がされている状況とはいえません。

たとえば、厚生労働省の研究費によって行われた市民を対象とした調査では、以下のような結果がられています。新型インフルエンザの疑いのある患者が発生した場合、その住所公表については「公表した方がよい」(52．9%)とする意見が「しない方がよい」(33．9%)という意見を上回っています。また、旅行者が患者となった場合、旅程を公開すべきかどうかについても同様の傾向で、「公開した方がよい」(92．1%)が「公表しない方がよい」(5．3%)を上回ってます。さらに、新型インフルエンザが発生した際の行政機関の情報提供のあり方については、「たとえ情報が不確実でも、情報が入り次第国民に伝えるべき」(60．3%)という意見の方が「情報提供に時間がかかってもいいから、科学的に正確な情報を国民に伝えるべき」(33．6%)という意見よりも多いです。まとめると、情報は公開して欲しいと言うのが市民の意見のようです。

また、インフルエンザワクチンの優先投与については、「子どもを優先すべき」(59．6%)が「社会的機能を維持する人を優先すべき」(31．2%)より多かっくなっています。これらの結果は、現在の政府の対応方針とは一致していません。優先順位の問題については、市民の理解を得るためには、どのように情報提供をするべきか検討する必要がありますね。

**あなたは…　町長**

【インフル編901】

新型インフルエンザ発生。集会をすると感染が広がる可能性があると、保健所から助言が。町主催の成人式が間近だが。。。

開催する？

Yes (開催する)
OR
No (中止する)

新型インフルエンザ編を問題点を明らかにし、解決を見いだすツールとして、是非ご利用下さい。販売されている問題は全部で20問あります。
(新聞第7号にも2問掲載されています。)

**あなたは…　市民**

【インフル編906】

新型インフルエンザの流行がおさまりそうもない。しかし、自宅にこもっている生活もそろそろ限界。子どもは外に出たがるし、自分も買いものがしたい。しかし感染は恐い。

出かける？

Yes (出かける)
OR
No (我慢する)

**あなたは　1人暮らしの大学生**

【インフル編908】

新型インフルエンザの流行に備えて食料を最低2週間分備蓄すべきといわれている。アドバイスに従い、

買いだめしておく？

Yes (買いだめする)
OR
No (やめておく)

# インフルエンザの大流行

高知県防災キャラクター©やなせたかし